

平成 29 年度（第 61 回）  
岩手県教育研究発表会発表資料

道徳分科会

人間としての生き方を思い描き，主体的に判断し生きようとする生徒の育成  
～道徳科において，学び合い・発問の工夫・自己の考えを表現することを通して～

平成 29 年 2 月 9 日  
大船渡市教育委員会  
大船渡市立大船渡中学校  
古 舘 教 之

# I 研究の概要

## 1 校訓 黒潮魂 ～明るく 賢く 逞しく～

## 2 学校教育目標

- (1) 自ら学び主体的に生きる人間の育成
- (2) 思いやりの心に満ちた人間の育成
- (3) 勤労と奉仕の心を重んずる人間の育成
- (4) 健康で逞しい人間の育成

## 3 めざす生徒像

- (1) めあてを見つけ、進んで学ぶ生徒
- (2) 思いやりの心を持ち、他と共に生きる生徒
- (3) 粘り強く、自らを鍛えつづける生徒
- (4) 視野を広げ、考えを深め、主体的に生きようとする生徒

## 4 研究主題

人間としての生き方を思い描き、主体的に判断し生きようとする生徒の育成  
～道徳科において、学び合い・発問の工夫・自己の考えを表現することを通して～

## 5 研究主題設定の理由

### (1) 今日の教育的課題から

- ① 「特別の教科 道徳」として、平成27年度から移行措置、平成31年度から全面実施
- ② 他教科に比べ、道徳の授業を苦手としがちな傾向
- ③ 深刻化する「いじめ問題」

### 教育再生実行会議の提言と取組

第一次提言 いじめ問題等への対応について（平成25年2月26日）

- ・道徳教育の抜本的改善・充実
- ・いじめ対策
- ・体罰禁止の徹底

- ・「**いじめ防止対策推進法**」成立（平成25年6月21日）
- ・道徳教育用教材「私たちの道徳」の作成・配布（「心のノート」の全面改訂）  
（平成26年度より使用開始）
- ・「道徳の時間」を「特別の教科 道徳」（小・中学校で週1時間）として新たに位置づける**学習指導要領の一部改正**（平成27年3月）

- ・「中学校学習指導要領解説 特別の教科 道徳」の一部改正（平成29年7月）

(2) 学校教育目標から

学校教育目標(1)は「自ら学び主体的に生きる人間の育成」を掲げている。しかしながら、「よりよい学校づくりのための学校評価」(保護者用)の結果をみると、質問項目14では、26.8%の家庭で主体性(自分で考え動く)が育っていないと考えている。

「よりよい学校づくりのための学校評価」(平成29年2月実施)

4 とてもあてはまる 3 ややあてはまる 2 あまりあてはまらない 1 まったくあてはまらない

番号	質問事項	4	3	2	1
14	お子さんの主体性(自分で考え動く)は育っている。	33	120	51	5

(単位:人)

(3) 本校生徒の実態から

- ① 自己肯定感がやや低い。
  - ② 自分の考えを他人に、または全体の場で表現する力が弱い。
  - ③ 自ら判断し行動していく力が弱い。
  - ④ hyper-QU ソーシャルスキル結果(現2・3年生)から、「配慮」と「かかわり」のバランスがとれていない。
- (平成28年6月, 11月実施)

(4) 教師の実態から

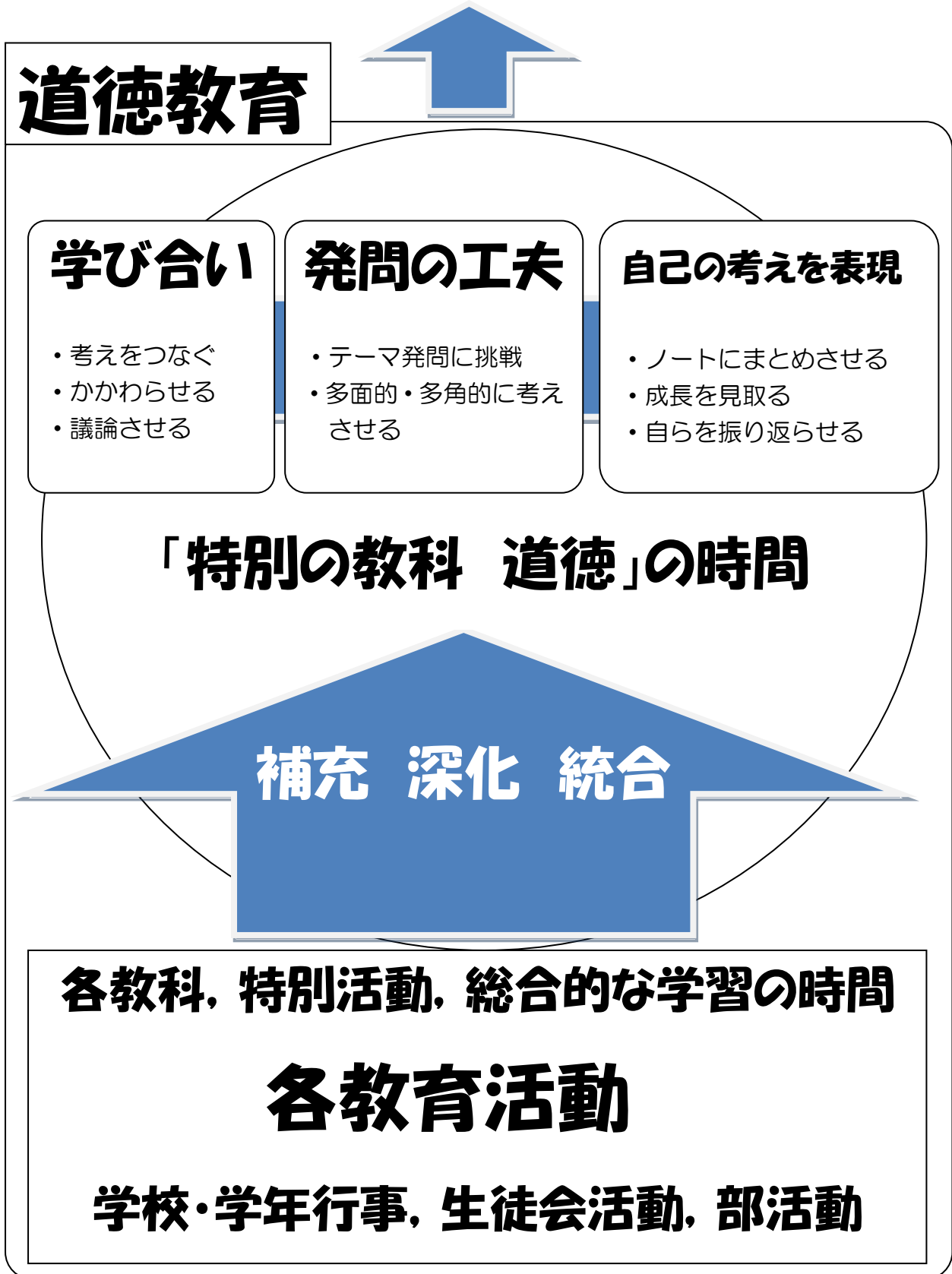
副読本を用いた授業実践による学び合いが少なかった。そのため、平成28年度から全学年で積極的に授業実践交流を行ってきた。その結果、道徳の授業の在り方について全教職員で深く考えるようになった。

## 6 本校の道徳教育の重点目標

「人間としての生き方を思い描き、主体的に判断し生きようとする生徒の育成」をめざす。

- (1) 思いやりの心を持ち、他と共に生きる指導の充実を図る。
- (2) 視野を広げ、考えを深め、主体的に生きようとする生徒の育成を図る。
- (3) 多彩な言語活動をいかし、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る。

人間としての生き方を思い描き、主体的に判断し生きようとする生徒の育成  
～道徳科において、学び合い・発問の工夫・自己の考えを表現することを通して～



## 8 研究の内容

### (1) 道徳の時間の授業改善

- ① 道徳授業研究会（全体研究会）の開催による指導技術の向上を図る。
- ② 道徳授業研究会（学年研究会）を開催し、お互いに授業を見合うことにより、共有体制をつくる。
- ③ 年間指導計画にしたがって、教科書を使った授業を行う。
- ④ 授業の中に、「学び合い」「発問の工夫」「自己の考えを表現」を取り入れる。

ア 仲間の考えを聴いたうえで、自分の考えを持たせ、それを発表させることで、自分の考えを、深化・変容・再構築する場면을授業で取り入れる。

#### 学び合い

- 「あなたは、今の発表（考え）をどう思う？」
- 「今の発表のよいところ（参考になったこと）を言ってみて」
- 「仲間の発表（考え）をあなたの言葉で言ってみて」

イ 生徒が主体的に考えたいくなるような発問を投げかけて、生徒の反応を記録する。

#### 発問の工夫

- 登場人物～の思いを支えたものは何か。
- 登場人物～はなぜそこまでできたのか。
- あなたならこの場面でどう行動するのか。
- この話からどんなことが学べるか。

ウ 道徳ノートを準備し、毎時間自分の考えや授業の感想を残す。

#### 自己の考えを表現

- 「生徒が考えたいくなるような発問」について考えさせ、授業で生かす。
- 自らを振り返って、成長を実感させる。
- 教師が発問や授業そのもののあり方を吟味する。

- (2) 道徳教育全体計画、年間指導計画の見直しと作成  
道徳教育推進教師を中心に、研究部による作成を行う。
- (3) 他教科、他領域との関連を示す別葉の作成  
全教職員による作成を行う。

9 研究の経過

年度	月	形態	研究・研修内容
28	4	職員会議 全体研究会	研究部 分掌提案 今年度の研究について
	5	職員会議	研修会：「慣れが肝心！」「道徳ノートについて」
	6	学年研究会 (2学年)	授業者 吉田 誠司(2年3組) 授業者 藤原 麻莉那(2年2組) 主題名 集団生活の向上のための役割と責任 【C-(15)よりよい学校生活, 集団活動の充実】 教材名 「三度目の号泣」 (学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから2年岩手県版』)
	7	全体研究会	授業者 和田 智恵(2年1組) 主題名 集団生活の向上のための役割と責任 【C-(15)よりよい学校生活, 集団活動の充実】 教材名 「三度目の号泣」 (学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから2年岩手県版』)
		職員会議	研修会：「新しい学習指導要領が目指す姿【論点整理より】」
	8	職員会議	研修会：「全体計画の別葉」
	9	職員会議	研修会：「道徳の時間の授業構想」
	10	全体研究会 プレ公開 地区道研	授業者 甘竹 浩枝(3年2組) 主題名 支え合う命【D-(19)生命の尊さ】 資料名 「余命ゼロ～命のメッセージ」 (学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから3年岩手県版』)
	11	職員会議	研修会：「『道徳の時間』の基本的な指導過程」
	12	職員会議	研修会：「久保中(広島県)の道徳教育の実践に学ぶ」
	1	全体研究会	授業者 佐藤 三和子(1年1組) 主題名 相手を思いやる心【B-(6)思いやり, 感謝】 教材名 「傘の下」 (学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから1年岩手県版』)
		職員会議	研修会：「多面的・多角的に考えるととは」
2		職員会議	研究のまとめと来年度の方向性 研修会：「学習課題の在り方について考える」(例)「思いやりとは何か？」 ではなく「真の思いやりとは何か？」など
3	研究部	研究計画作成	
29	4	職員会議	研究部 分掌提案
		全体研究会	今年度の研究について(3つの視点の確認等) 教科実践研究計画の作成 研修会：「考え、議論したくなる」学習課題の提示と「まとめ」のポイント

29	5	学年研究会 全体研究会	授業者 戸羽 智英（2年1組） 主題名 誠実な生き方【A-(1)自主・自律，自由と責任】 教材名 「償い」（学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから2年岩手県版』） <b>研修会：「話し合い活動の工夫&amp;アイデア」</b> 5月30日 学区連携研究会 大船渡小学校 道徳の授業を参観	
	6	学年研究会 全体研究会	授業者 平船 大輔（1年2組） 主題名 自分の中にある弱さと強さ【D-(22)よりよく生きる喜び】 教材名 「つかの間の出来事」 （学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから1年岩手県版』） 6月26日 地区道研 大船渡小学校6年生 本校から5名授業参観 <b>研修会：「資料分析と発問構成を考える」</b>	
	7	学年研究会 全体研究会 気仙地区 道徳研究会	7月11日 地区道研 事業 授業者 和田 智恵（3年1組） 主題名 郷土を愛する心【C-(16)郷土の伝承と文化の尊重，郷土を愛する態度】 教材名 「だからこの海を」 （岩手県版中学校道徳資料集 郷土の明日を見据えて～先人の生き方に学ぶ～） <b>研修会：「生徒が主体的に考えたいくなるようなテーマ発問の考え方」</b>	
	県道研	7月31日（月） 道徳講習会（公開授業指導案検討会）		
	8	全体研究会	理論研究会，実践の経過等（1学期の反省と学校公開に向けて） <b>研修会：板書の在り方</b>	
	9	学年研究会 全体研究会	公開授業指導案検討会 助言者，司会者，授業者，関係者等打合せ 紀要の確認，補助資料（別葉等）の確認	
	10	全体研究会	分科会運営について	
	11	県道研 11月2日 （木）	授業者 野口 貴弘（1年1組） 主題名 自分の中にある弱さと強さ【D-(22)よりよく生きる喜び】 教材名 「つかの間の出来事」 （学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから1年岩手県版』） 授業者 甘竹 浩枝（2年2組） 主題名 誠実な生き方【A-(1)自主・自律，自由と責任】 教材名 「償い」（学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから2年岩手県版』） 授業者 藤原 麻莉那（3年2組） 主題名 郷土を愛する心【C-(16)郷土の伝承と文化の尊重，郷土を愛する態度】 教材名 「だからこの海を」 （岩手県版中学校道徳資料集 郷土の明日を見据えて～先人の生き方に学ぶ～）	
	12	職員会議 全体研究会	県道研当日の授業からの学び。成果と課題。 今後の課題について検討する。研究収録の原稿作成。	
	30	1	職員会議	センター発表資料を基にした共通理解
		2	センター発表	2年間の道徳科の授業づくりの実践について、成果と課題を発表。

## Ⅱ 研究の実際（平成 28～29 年度）

### 1 道徳の時間の授業改善

(1) 本校の研究項目「学び合い」「発問の工夫」「自己の考えを表現」を柱に授業づくりの実践を行い、学習が効果的に行われる指導を工夫する。

#### ① 「学び合い」・・・何のために学び合うの？

〔生徒〕 仲間の考えを聴き、自分の考えを持ち、それを発表させることで、自分の考えを深化・変容・再構築する。

〔教師〕 生徒に自分の考えを深化・変容・再構築するための場면을授業に取り入れる。生徒の考えをつなぎ、生徒どうしをかかわらせる手立てや仕掛けを考える。生徒がかかわるために、どんな手立てをしたのかを明確にする。

#### ② 「発問の工夫」・・・何のためにテーマ発問に挑戦するの？

〔生徒〕 考え、議論することを通して、人間としての生き方についての考えを深める。

〔教師〕 「生徒が主体的に考え、議論したくなるような発問」をすることで、生徒が自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深めることができる。

※ 本校では、永田繁雄氏（東京学芸大学）が提唱する『「テーマ発問」で授業をつくる』ことに取り組んでいる。教師は「場面発問」と「テーマ発問」を意識して使い分ける。一般的に中心場面で道徳的価値を問う重要な発問を中心発問というが、中心発問は、時には場面発問であったり、テーマ発問であったりすることもある。

場面 発問	教材中にある場面に即して登場人物の心情や判断、行為の理由などを問い、気づきを明らかにする発問。	例：〇〇はどんな気持ちか。その時〇〇は何を考えているか。など
テーマ 発問	教材のもつ主題やテーマそのものに関わって、それを掘り下げたり、追求したりする発問。	例：〇〇はどんな人で、この生き方をどう思うか。この話にどんな意味があるか。□□（価値）についてどう考えるか。など

（平成 27 年 9 月 29 日 平成 27 年度「授業カブラッシュアップ事業」【講話用補助資料】より）

#### ③ 「自己の考えを表現」・・・何のために書き残すの？

〔生徒〕 自らを振り返って、成長を実感する。仲間の良さや考えを共有し、次の学びへとつなげる。

〔教師〕 生徒に中心発問について考えさせ、生徒の考えを授業に生かす。教師が発問や授業そのものの在り方を吟味する。



## 2 学年体制での取組

- (1) 道徳授業研究会（学年研究会）を開催し、お互いに授業を見合うことによる共有体制をつくる。授業の構成や展開などについては授業者に任せるのではなく、学年体制で行う。
  - ① 教材文の選定
  - ② 学習指導案の作成
  - ③ 補助資料，紙板書の作成
  - ④ プレ授業の実施と学年研究会
- (2) 作成した学習指導案，補助資料等は共有フォルダに保存し，校内全体の共有財産とする。

## 3 道徳教育全体計画，道徳年間指導計画，別葉の作成と改善

- (1) 年間指導計画にしたがって，教科書を使った授業を行う。道徳年間指導計画には，中心発問（テーマ発問または場面発問）の例を記入し，授業者が授業構成を考える際の参考となるように工夫した。
- (2) 教材の大要や内容項目から，各教科，各領域，防災・復興教育との関連を考え，道徳年間指導計画に記載する。

## 4 学習形態

- (1) 道徳の時間は，「コの字型」の市松模様を基本とした座席の配置とする。

教室全体に安心して発言できる雰囲気をつくっていくことが必要である。生徒自身が学ぶ，学び合う，様々な考え方を聴き合う，お互いを認め，協力して活動する，自分の考えや意見を伝えるなどの場面を仕組んだり，仕掛けたりする。そうすることで，お互いの表情が見えやすく，皆で話し合ったり，学び合ったりしやすくなり，学級全体が優しく温かい雰囲気となる。また，教師にとっては机間指導がしやすくなり，一人ひとりの生徒の学びを支援しやすくなる。

## 5 「道徳ノート」の活用

- (1) 自分自身の振り返り

生徒が主体的に考え，議論したくなるような発問についての自分の考えをノートに記入させたり，授業を通して学んだことなどを記入させたりして，次への学びにつなげる。
- (2) 評価

「道徳ノート」への生徒の記述は，教師が生徒の成長を見取る方法の一つであり，評価資料ともなる。

「生徒の学習状況や道徳性」に係る成長の様子を継続的に把握し，指導に生かすように努める。

## 6 授業実践

- (1) 生徒も教師も道徳に慣れる。
- (2) 授業を観る視点を明確にした授業研究会を行う。
- (3) 平成28年度の研究成果と課題を受けて，平成29年度の実践につなげた。

## 【授業実践例 1】

期 日	平成29年 6月23日 (金)
対象学年	1年
主 題	自分の中にある弱さと強さ
内容項目	【D-(22)よりよく生きる喜び】
教材名	「つかの間の出来事」(学研『中学生の道徳 かけがえのないきみだから1年岩手県版』)

### 【校内研究会記録より】

#### 1 授業者から

- (1) 人には弱さがあることに共感させ、それを乗り越える強さをもつこと、そして、そういう生き方をめざす心情をもたせることをねらいとした。
- (2) 中心発問は、「～心の雲がなくなったのは～」とした。母親に正直に言うことはどれほど勇気が必要だったかを、生徒たちに自分のこととして考えさせることが弱かった。

#### 2 研究協議

##### (1) 学習指導案について

- ① 「研究主題との関連」について、「つなぐ」場面や、「生徒が主体的に考えたくなる発問」はどのかなかを指導案に明記した方がよいのではないかと。
- ② 「生徒の実態」について、本時の価値に関連しての生徒の実態を記述する。

##### (2) 授業を観る視点に関して

- ① 「生徒と生徒とのつながり」について、小グループ内の交流では自分の考えと他者の考えを比較して話し合うことができている。
- ② 一斉授業の中で「生徒と生徒とのつながり」を持たせることも必要であり、その際には教師のコーディネートが重要となってくる。
- ③ 教師が生徒と一対一にならないように、場面によって生徒を意図的に指名したり、挙手をさせたりしている。

##### (3) ねらいを達成するための発問構成について話題になったこと

- ① ねらいにある「人間としての誇り」は、この教材ではどの部分か？1学年ではどう捉えたか？
- ② “中心発問”について、「心の雲が～どのような気持ちからだろうか」が適切だったのだろうか？
- ③ 「今までの自分の嫌なところにさよならができたのはなぜだったのだろうか」を中心に発問にするという考えはどうか。
- ④ 中心発問を「心の雲が～どんな気持ちの変化があったのだろうか。」「～なぜ心の雲がなくなったのだろうか。」
- ⑤ “学習課題”と“中心発問”の在り方について。
- ⑥ 導入と本時のねらいにずれがあったのではないかと。
- ⑦ 学習課題「なぜ私はあやまることができたのか。」というように1年生の生徒が考えやすくなるものにする。
- ⑧ 短時間の出来事なので「～どんな生きかた～」よりも具体的な場面や表現にした方がよかった。
- ⑨ 店の人に正直に言ったことと母に正直に言ったことの意味のちがいは？
- ⑩ 中心発問を出すタイミングを考え、子どもたちがしっかり考える時間を確保する。
- ⑪ 「～お母さんに怒られるかもしれないけれど…」がポイントになるのではないかと。

### 3 指導助言 滝沢市立第二中学校 校長 千葉 康彦

#### (1) 教材文の見方、分析について

- ① 道徳の教材文には2種類しかない。主人公が変わるか、変わらないかである。今回は主人公が変容する教材文である。
- ② 主人公の弱さ(渋柿\*<sup>1</sup>)と、そうせざるを得ない主人公の状況(土\*<sup>2</sup>)を十分理解させること。そして、主人公の弱さに共感できるか、そのような主人公についてどう思うか考えさせる。  
→ ‘だめだ、そのわけは～’ ‘しかたない、そのわけは～’ の話し合い。  
→ ‘しかたない～’ なぜ、主人公は変わったのだろうか。  
「これじゃダメだなど変わっていく場面」(継ぎ目\*<sup>3</sup>)、高まった価値観、この教材文では「店に謝る、母に謝る場面」が(甘柿\*<sup>4</sup>)と捉える。

(\*<sup>1-4</sup> 助言者からの資料提供「資料分析と発問構成を考える」「教材分析シート」より)

- ③ 教材文はキーワードの集まり。

(例)「いろんな考えが頭をよぎった。」 それはどんな考えだろうか。

#### (2) 「学び合い」(生徒をつなぐ)について

- ① 話し合うことが大事なのではなく、人の意見を聞いて、自分の心の中で価値観が深まっていくことが大事。
- ② 「～さんの意見にヒントをもらったのですが・・・」という話型。

#### (3) 道徳の教科化、「主体的に考えたいような発問」

- ① 「あなたなら～どうしますか。」ではなく、「あなたなら～できますか。」という発問。

#### (4) 振り返りの大切さ

- ① 導入の場面で紹介した「弱さ」に負けなかった生徒に、振り返る場面で、「なぜ負けなかったの？」とたずねる。

#### (5) 時間配分について

- ① 事前に教材文を読ませておく。



## 4 成果と課題

### (1) 成果

- ① 授業者だけでなく学年の教師が一体となって学習指導案を練り上げ、チームで組織的に研修をすることができた。例えば、中心発問を場面発問にするか、テーマ発問にするかを学年会で検討するなど、授業改善に向けて取り組んだ。
- ② 本校は「主体的に判断し生きようとする生徒を育てようとしている。そのためには、「学び合いを通してお互いを認め合い、自己の考えを表現できる」ように授業実践を進めている。

### (2) 課題

- ① 生徒がより深く自分のこととしてとらえられるように、教師が生徒どうしの考えや発言をつないだり、切り返しの発問や補助発問をしたりすること。教師の切り返しにより生徒が葛藤する場面を設定すること。
- ② 本時のねらいを達成するための中心発問を吟味すること。中心発問は生徒が主体的に考えたいくなるようなテーマ発問となるように引き続き考察していく。
- ③ 学習課題と中心発問のつながりについて吟味すること。
- ④ 「振り返り」について。  
生徒のノートをもとに授業の在り方を修正していく。生徒がどこまで学んだか。考えの交流ができたか。

## 5 県道研当日にむけて（1学年）

全体研究会での学びを受けて、1学年研究会では、中心発問（生徒が考えたいくなるような発問）について話し合いを重ねた。昨年11月に行った第42回岩手県道徳研究会での授業では、中心発問を「母になぜ打ち明けたのだろうか。」とし、価値理解に迫った。1学年分科会の助言者（県南教育事務所 指導主事 及川 仁）からは、中心発問では「生徒の考えが多面的・多角的に広がり、自分なりの納得解を見つけていた。」という助言をいただいた。

## 6 県道研当日の生徒の道徳ノートより抜粋した文

- ・自分も何か悪いことをしてしまって素直に謝れないことがたくさんあります。人に見られていなければ隠してしまうことも多いです。でも、この主人公は最初お店を出たけど後で謝りに行ったことが、とても立派な行動だと思いました。私もこれを見習って自分が何か悪いことしたら素直に謝れるようになりたいです。
- ・本当のことを言えば気持ちがすっきりすることを知り、母にも自分のしたことを知っておいてほしかった。また、自分の悪い心に負けずしっかり謝り、後悔をしないようにしたいという思いを知っておいてほしかったから。
- ・主人公のような自分の弱い部分に負けない強い人になりたい。
- ・主人公がはじめは後ろ向きな気持ちで自分がしたことを思わず隠してしまったけど、最後にはそんな自分から変わって正直に言うことができ、新しい前向きな自分になれたので私も前向きに堂々と生活していきたいと思ったし、正直で素直な自分になりたいです。

## 【授業実践例 2】

期 日	平成29年 7月11日 (火)
対象学年	3年
主 題	郷土を愛する心
内容項目	【C-(16)郷土の伝承と文化の尊重, <u>郷土を愛する態度</u> 】
教材名	「だからこの海を」 (岩手県版中学校道徳資料集 郷土の明日を見据えて～先人の生き方に学ぶ～)

### 【校内研究会記録より】

#### 1 授業者から

##### (1) 2時間扱いに挑戦

現3年生が1年生の時、「総合的な学習の時間」に大船渡魚市場を訪問して学んでいるが、漁業に関する知識や素地がないため、事前にわかめ作業の苦労等について映像を通して学んだ。また、1時間目の最後には次時の学習課題につなげるために次時に考えたいことについて書き残した。

##### (2) 発問について

「研究をし続ける藤蔵を支えたものは何だったのだろうか」の発問と中心発問（テーマ発問）「なぜ、藤蔵さんは郷土の海に対する思いを生涯絶やすことがなかったのだろうか」が似ているため、これでよいのかお聞きしたい。

##### (3) 評価についての訂正

「・・・道徳的心情を育てる」を「・・・道徳的实践意欲を育てる」に変更する。

#### 2 研究協議

##### (1) 学習指導案について

- ① 防災副読本（「いきる」「かかわる」「そなえる」）との関連項目を指導案と別葉に入れる。
- ② ねらいと評価はそろえる。(指導と評価の一体化)

##### (2) 2時間扱いの授業について

- ① 生徒たちが考え、議論する時間を確保できる良さがある。1時間で扱うと範読に10分かかるため、考え、議論する時間がとれない。「次の時間に考えたいことは何か」という問いに対する生徒の考えをいかし、次時の学習課題を設定したことは、生徒が主体的に学習に取り組むことにつながった。また、2時間扱いにすると、ゆとりをもって、じっくりと「考え、議論する時間」が確保できる。
- ② 生徒の実態に応じて、学校としての思い、学年としての考えをしっかりとをもって、授業をするのであれば、2時間扱いも考えられる。
- ③ 2時間扱いのデメリットは何か？2時間にすれば、価値が深まるのは当然。年間35時間の道徳の時間のうち、2時間扱いにした場合の評価はどうするのか。家庭学習とのリンク。教材文を読んで感想を書いてくることを課題にしたり、朝読書の時間を活用したりする。学校として、学年として35時間の道徳の時間に22の内容項目に触れられるように計画していく。

### (3) テーマ発問の在り方

- ① 「研究をし続ける藤蔵を支えたものは何だったのだろうか」という発問と「なぜ、藤蔵さんは郷土の海に対する思いを生涯絶やすことがなかったのだろうか」という中心発問（テーマ発問）は似ているため、生徒たちにとっては答えにくかったのではないか。

改善案としては、前者は「研究者として」、後者は「藤蔵さんの思い」に関して発問すると答えやすかったのではないか。わかめ養殖の辛さについて、もっと触れる必要があったのではないか。人間理解（人間の心の弱さ）の部分が弱かったかもしれない。しかし、「皆はできるの？」などという授業者の問いかけがあり、人間理解につなげようとする意図が見られた。

- ② 「研究をし続ける藤蔵を支えたものは何だったのだろうか」という発問と「なぜ、藤蔵さんは郷土の海に対する思いを生涯絶やすことがなかったのだろうか」という中心発問（テーマ発問）の違いは何か。

期待する生徒の反応に書いてあるように、前者は「郷土発展のため」、後者は「ふるさとが好きだ」という故郷への思い」を狙った。

- ③ 「研究し続ける・・・」の発問へは生徒の反応がよかった。「なぜ、藤蔵さん・・・」の中心発問（テーマ発問）の生徒の反応が少なかった。この2つの発問の間に入れる発問があってもよいのではないか。

- ④ 藤蔵さんの郷土への思いはぶれていない。周りはそういう藤蔵さんの姿を見て、少しずつ協力的になってきた。お互いの立場で考えていく。中学校の教材文は題名を大事にする。「だからこの海を」というのは、災害に弱い天然のものではなく養殖を進めていこうとする藤蔵さんのこの海に対する大きな思いがあったのではないか。末崎中ではこの教材を1年生で行う。最初は藤蔵さんの心情で扱ったが、周りのサポートに目を向けるようにしたことはある意味多面的である。藤蔵さん中心の発問だけでなく、切り口を変えて発問することも考えてみることも必要なのではないか。

- ⑤ 2つ目の発問と中心発問を合わせて1つにする。「郷土愛とは何か?」「地元で頑張っている人と郷里を離れて頑張っている人では何が違うのか?」などという発問をしてはどうか。

### (4) 学び合い（生徒同士をつなぐ）

- ① 「～さんの考えはどう思いますか。」と毎回言葉に出してつなごうとするだけでなく、言葉に出さないけれども生徒の考えや発言をつなぐ手法についても学んでいく。

- ② 「～さんと同じように」、「～さんとは違って」など、小学校でやってきた話型を大事にしながらか、育てていく。発言力の強い生徒だけでなく、皆に意見を出させていくように進める。

- ③ 「同じような考えの人」などと聞き返す方法も取り入れていく。

### (5) 振り返り

- ① 道徳ノートを見ると、実践意欲が見られる記述があった。将来、大船渡にいなくても郷土のために何かをしたいと考えている生徒もいた。

- ② 書かせて発表させる時間の確保が難しいので、授業者は十分手立てを考えていく必要がある。

### 3 指導助言 沿岸南部教育事務所 主任指導主事 佐守 直人

この教材文の人物は故郷のために初志貫徹しているため、人間理解させることがかなり難しい。

#### (1) 授業を通して学んだ点

- ① 男女分け隔てなく対話ができる。皆がニコニコしている。温かくお互いを認める雰囲気がある。普段から学級で互いを認め合うことができている学級である。
- ② 「考え、議論する道徳」、議論するとは、討論ではない。様々な考えを出し合い、いろんな新しい考えに出会い、それを自分のものにしていくことである。「漁師について考えた人はいないかな?」「地域について考えた人はいないかな?」と同じ考えを持っている生徒に発言させる、考えを比較させるような話合いのコーディネートについてとても参考になった。また、自分が、気づかなかったことを「なるほどんぐり」として自分の考えに付け加えることは自分の成長を実感できるよい手法である。
- ③ 生徒たちの実態を考えて2時間扱いで取り組んだことに敬意を表する。

#### (2) 授業を通して皆で考えたい点

- ① 郷土愛の振り返り。「子どもたちは今まで地域に対してどうだったのかな。」「この道徳の時間を通して何を考え、何を学んだのか。」いろいろな地域に出て行って生活していても郷土への思いをはせる。「あなたたちにとっての郷土愛とは何なのか。」それを振り返ることである。
- ② 発問について。2つ目の発問と中心発問の違いはわかりづらい。人間理解を出すとすれば、チリ津波を扱えばよいのではないか。打ち砕かれた人間理解を出させることによって、「だからこの海を」大切にしなければならないということにつながる。顕微鏡を使うために、隣町の広田まで歩いて行ったことなどを取り上げる。

#### (3) 郷土愛について

- ① 「先達に支えられて生きていることに気づく、先人の皆さんの恩恵、尊敬と感謝の気持ちをもつ、主体的に関わり郷土のために自分ができることを考える、郷土の発展のために自分が寄与しようとする意識を高める」ことを意識して指導にあたる。





## 4 成果と課題

### (1) 成果

- ① 生徒の実態を考え、2時間扱いの道徳に挑戦し、生徒が考えたいくなるような学習課題を設定できたことは、主体的な学びにつながる。そして、授業者が話し合いをコーディネートすることにより、対話的な学びが生まれる。さらに、生徒がじっくりと考える時間を保障し、議論する（様々な考えを出し合い、いろんな新しい考えに出会い、それを自分のものにしていくこと）ことにより、深い学びとなった。
- ② 学級、学年のリレーション（心と心の触れ合い、お互いを認め合える人間関係）を常日頃から築くことで、発言しやすい雰囲気となり、本音で語り合える道徳の授業に近づけた。
- ③ 生徒同士を「つなぐ」手法について取り組んでいることを確認できた。
- ④ 生徒が考えたいくなるような発問に挑戦し続けていること。中心発問に焦点をあて、じっくりと考えさせることで、議論する道徳になった。

### (2) 課題

- ① 学習指導案について  
防災副読本（「いきる」「かかわる」「そなえる」）との関連項目を指導案と別葉に入れる。  
ねらいと評価はそろえる。（指導と評価の一体化）
- ② 本時のねらいを達成するための中心発問を吟味すること。中心発問は生徒が主体的に考えたいくなるような発問となるように引き続き考察していく。
- ③ 授業者が意図的に何について「振り返り」をさせるのかについて、吟味していく。

#### 【自分ができること、これからどう生活していくか】

- ・ これから自分たちにできると思うことは、この大船渡を今まで以上に好きになって、他の地域の人たちにも伝え、地域の伝統である郷土芸能などをしっかり残していくことだと思った。また、復興も少しずつ進んできていて自分たちも少しでも協力して大船渡の街を残してつづいていきたい。
- ・ 今回の授業で自分がこれから大船渡のために何ができるかを改めて考えさせられました。自分は市役所職員になりたいと思っているので、そのために頑張って勉強することもいつかは大船渡の発展につながると思うので、これから頑張って勉強したいです。
- ・ 自分たちが生まれ育った大船渡に対する気持ちを考え直し、地域の人たちやいつもお世話になっている人たちに感謝しながら生活しようと思いました。これからは大船渡の人たちとの関係をもっと大切にしようと思いました。
- ・ 藤蔵さんや森下さんのように地域を発展させようと頑張ってきた人や今も頑張っている人がいるということを忘れず、漁業をしている人たちの願いでもあるように「さんま」を美味しく味わいたいと思った。
- ・ 普段の挨拶や文化祭での合唱等で町を明るくすることや郷土芸能を教わったり学んだりして地域の伝統を受け継ぎ、町の時代の移り変わりに関わることが自分たちにできると思った。自分が生まれたこの地域とこの地域に住む仲間のために努力した小松さんはたくさんの人に感謝されたいだろうし、小松さんはこの活動で地域に感動を与えたかったんだろうなと思った。

【生徒の振り返り 道徳ノートから】



### Ⅲ 研究のまとめ

#### 1 成果

- 研究主題「人間としての生き方を思い描き、主体的に判断し生きようとする生徒を育成」をめざし、全教職員で道徳科の授業実践に取り組み、研究を続けてきた。特に道徳科の授業における「学び合い・発問の工夫・自己の考えを表現する」の3つを柱にして、道徳科の授業づくりに挑戦できたことは大きな財産となった。
- 学習形態をコの字型にすることで、教師は生徒の考えを吸い上げ、切り返すなどして考えをつなぎやすくなった。また、学び合いの中に小グループでの話し合い活動を取り入れることで、生徒同士が交流し、他者の意見を聞くことで自分の心の中で価値観が深まった。
- 「生徒が考えたくなるような発問」に挑戦し続けること、特に「テーマ発問」（教材のテーマそのものに関わってそれを掘り下げたり追求したりする発問）に挑戦することを通して、生徒がじっくりと考え、議論する道徳になるような授業づくりに取り組んだ。その結果、様々な場面で主体的に考え、判断し行動する生徒が育ってきている。
- 道徳教育の重点を明確にし、全体計画や年間指導計画をより実効性のあるものに改善できた。

#### 2 課題

- 本時のねらいを達成するための中心発問を吟味する。中心発問は生徒が主体的に考えたくなるような発問（特に「テーマ発問」となるように引き続き考察していく。
- 道徳科と各教科との関連を図り、道徳教育全体を通じて生徒を育てるために、年間指導計画と別葉の見直しを継続する。
- 道徳科の評価についての学びを継続する。道徳科における「生徒の学習状況や道徳性」に係る成長の様子についての評価はどうあるべきかを検討していく。

以上のようなことをふまえながら、今後も継続して研究を推進していきたい。